

19世紀中葉のドイツにおける『ライプツィヒ絵入り新聞』 の登場とその意義

——ノヴァラ号の世界周航（1857-59）に関する報道を事例として——

Erscheinung und Bedeutung der 'Leipziger Illustrierte Zeitung' in Deutschland in der Mitte 19. Jahrhundert

——Der Fall von dem Bericht über die Weltfahrt der Novara (1857-59)——

政治経済学研究科 政治学専攻 2004年度入学

大 井 知 範

ŌI, Tomonori

【論文要旨】

19世紀の西欧社会における技術革新は、挿絵入り刊行物の普及を可能にした。なかでも1840年代に各国で登場した絵入り新聞は、視覚的效果をともなった新しい媒体として、市民社会で大きな意味を持っていたと考えられる。本稿では、ドイツ最初の絵入り新聞『ライプツィヒ絵入り新聞』をテーマとして取り上げ、同紙誕生の背景、ならびにその役割について議論を展開した。

同紙創刊の背景を考えるにあたり、創刊者のパーソナリティ、時代背景という二点に注目した。その結果、ヨハン・ヴェーバーという先見性と実行力を兼ね備えた人物の存在があったこと、さらには、木版画技法の進歩や印刷の高速化といった19世紀の技術革新が、絵入り新聞の誕生と普及を後押ししていたことが明らかになる。また、同紙の論説からは、家庭誌、大衆メディアという新しい視覚媒体としての理想像が浮かび上がる。この理想が紙面にどのように反映されていたかは、1850年代末のオーストリアの世界周航（ノヴァラ号遠征）に対する報道から確認できる。

【キーワード】 ライプツィヒ絵入り新聞、挿絵、家庭誌、大衆メディア、ノヴァラ号の世界周航

はじめに

アメリカの版画研究者ウィリアム・アイヴィンス（William Ivins）は、かつて19世紀を「グラ

フィズムと大衆の時代¹⁾」と表現した。市民層の増加と識字率の高まりにより、各種の印刷物に対する需要が増していたこの世紀は、刊行物が次第にビジュアル化されていく時代でもあった。当初は書籍のなかに限られていた挿絵は、技術革新の恩恵を受けて、雑誌や新聞といった定期刊行物にも多く登場するようになる。やがて、世紀後半に出現する写真技術により、木版画やイラストの重要性は低下していくが、挿絵が19世紀の西欧社会で持っていた意義を否定することはできない。

印刷物への視覚効果の導入は、書籍分野においてはすでに19世紀以前から見受けられたが、新聞のなかに頻繁に登場するようになるのは、1840年代以降のことである。なかでも、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(The Illustrated London News, 1842年創刊)と『イリュストラシオン』(L'Illustration, 1843年創刊)は、英仏の絵入り新聞のパイオニアとして、また息の長い代表的絵入り新聞としてよく知られている。両者は、近代ヨーロッパにおける本格的な絵入り新聞の先駆けとして日本でも研究の対象とされ、19世紀を知るための歴史資料としても活用されてきた²⁾。しかし、両紙と同時期に刊行されたドイツの『ライプツィヒ絵入り新聞』(Leipziger Illustrierte Zeitung, 1843年創刊、以下LIZと略記³⁾)は、研究素材としてはもちろん、その存在自体があまり知られていない。ドイツ・メディア史研究の領域においても、百万部発行紙『ベルリン絵入り新聞』(Berliner Illustrierte Zeitung, 1891年創刊)に比べ、LIZに対する関心は低いといわざるをえない⁴⁾。

それゆえ本稿では、日本ではほとんど触れられることのないこのドイツ最初の絵入り新聞LIZを取り上げ、その創刊の背景と編集部の意図を考察の対象とする。挿絵の導入はいかにして可能となり、何のためにドイツで絵入り新聞が刊行されたのか、前半部ではこの二点を中心に見ていく。さらには、LIZの紙面を実際に眺めることによって、ニュース報道の際に挿絵がどのように利用されていたかを検証する。その際、オーストリア帝国海軍によって1857年から59年にかけて行われた、フリゲート艦ノヴァラ号(Novara)の世界一周事業を事例として用いる。ドイツ連邦内で初めて成し遂げられたこの世界一周国家プロジェクトに関する歴史研究は、欧米の学界でこれまで多くの成果を得ている⁵⁾。しかし、この世界周航に示された当時のドイツ・メディアの反響については、管見によれば、これまで研究として取り上げられてこなかった。それゆえここでは、ノヴァラ号遠征がドイツ・メディアでどのように映し出されていたかをLIZ読者の視点に立って検討する。

1. 『ライプツィヒ絵入り新聞』創刊の背景

(1) ヨハン・ヤーコプ・ヴェーバー

1803年4月3日、LIZの創刊者であるヨハン・ヤーコプ・ヴェーバー(Johann Jakob Weber)は、スイス・バーゼルの亜麻布職工の家に生まれた。1818年、彼はまず地元バーゼルの出版業者のもとに徒弟として入り、その後1825年の春にジュネーヴの書籍販売業者のもとへ移った。同年の秋には、当時の芸術と文学の中心地であったパリへ赴き、ディド(Didot)社の業務に携り、さらにその翌年、ドイツ出版業の中心地であり、彼の生涯の活動拠点となるライプツィヒで職を得た。

1827年5月から1年間、ドイツ南部のフライブルクでさらなる修行を積んだヴェーバーは、1830年にライプツィヒへ戻り、フランス系出版社ボサンジェ・ペル（Bossange Père）社の現地支店長に就任した⁶。

このように、青年時代に各地の出版・書籍販売業者のもとで修行を重ねることにより、ヴェーバーは自立した出版業者になるために必要不可欠な知識や感覚を身につけていった。そのうえ、フランスの有力出版社のもとで働く機会を得たことにより、彼の目は西欧出版界の最新動向に向けられる。それを象徴するのが、支店長就任4年目の1833年5月に同社から刊行された『プフェニヒ・マガジン』（Das Pfennig Magazin）という雑誌である。この週刊誌は、前年3月にロンドンのチャールズ・ナイト（Charles Knight）社から創刊された『ペニー・マガジン』（Penny Magazine）⁷をモデルにライプツィヒで刊行され、木版画の最新技術を取り入れた画期的な絵入り雑誌として世間の注目を浴びた。『プフェニヒ・マガジン』は、創刊から半年後には3万部を発行し、その後も着実に部数を伸ばした。同誌の成功の裏には、ブロックハウス（Brockhaus）ら過去に成功した出版業社の手法が取り入れられたという事実もあったが、ヴェーバーのこれまでの経験が宣伝活動にいかされたことも飛躍の要因であったといわれている⁸。この雑誌の編集に携わることで、ヴェーバーは絵入り刊行物の将来性を見出したことであろう。ただし、絵入り雑誌としての完成度において、同誌は彼にとって決して満足できるものではなかった。ヴェーバーのこのときの経験と成功、そして質に対する不満は、自身の手で「第二のプフェニヒ・マガジン」を刊行するという新たな構想へとつながっていく⁹。それゆえ、LIZ誕生の原点はまさにこの『プフェニヒ・マガジン』にあったと見ることができる¹⁰。

『プフェニヒ・マガジン』創刊の翌年、ヴェーバーはボサンジェ・ペル社を退社して自らの出版社ヴェーバー（J. J. Weber）社を設立する。知人のヌーラント（Louis Nuhlandt）との共同出資により始められたこの出版事業は、皮肉にも彼と袂を分かち1837年頃から軌道に乗り出した¹¹。30年代のヴェーバー社の出版活動は、文芸書や科学書、旅行記などさまざまなジャンルにおよんだが¹²、ヴェーバー社に利益と名声をもたらした最たるものは、一連の絵入り図書の刊行であった。LIZ創刊号（1843年7月1日付）の巻末には、当時ヴェーバー社から刊行されていた絵入り図書5点の紹介記事が掲載されているが、そのなかでも特に成功を収めた挿絵本が、ナポレオン伝（P. M. Laurent, *Geschichte des Kaisers Napoleon. Illustriert von Horaz Vernet*）とフリードリヒ大王伝（Franz Kugler, *Geschichte Friedrichs des Großen. Illustriert von Adolph Menzel*）の2作であった¹³。後者は、フリードリヒ大王即位百周年にあわせて刊行され、英蘭露の各国語へも翻訳されている。さらにはプロイセンからメダルを授与されるなど内外から称賛を浴び、メンツェルのスケッチは後世まで高い評価を受けることとなる¹⁴。

このように、多彩なイラストを盛り込んだ人物伝や博物学関連書籍が順調な売り上げをもたらすにつれ、ヴェーバーは絵入り図書事業への確かな手ごたえをつかんでいった。しかし、彼は書籍分野の成功だけでは満足せず、新聞のなかに挿絵を、しかも大量にはさみ込むという新領域の開拓を

決意する。ドイツ最初の絵入り新聞が誕生する背景には、ヨハン・ヴェーバーという、イラストの可能性にいち早く気づいていた野心的な出版業者の存在があったのである。

(2) 西欧における挿絵技術の進化

ドイツ最初の絵入り新聞となる LIZ の話に入る前に、ここではまず、定期刊行物への挿絵の導入が可能となった技術的背景を概観しておきたい。9 世紀の東洋における発祥から 500 年近く遅れて始まった西洋の木版画は、15 世紀中葉の活版印刷術の発明により、印刷物のなかに登場するようになる。ドイツを中心に発展した木版画は、挿絵として本のなかに取り入れられ、この頃木版挿絵本が急速に普及した。16 世紀に入ると、イタリアやネーデルランドで版元制度が広がり、出版者（出資者）・画家（下絵師）・版画制作者が一体となった版画流通システムが確立した。また、この時代から書籍の挿絵用に銅版画が大量に使用されるようになり、以後エッチング（腐蝕銅版画）や多色刷り等の技術革新を受けて、17・18 世紀は銅版画主流の時代となる。これら銅版画の進展とともに、版画制作の中心はフランス、イタリア、オランダへ移り、かつての木版画の中心地ドイツでは 18 世紀末に新たな技術が登場する。すなわち、化学原理を応用した石版印刷の新技术は、ミュンヘンで生まれた後、19 世紀初頭には西欧へ拡大し、とりわけロマン主義画家の間で普及した¹⁵。

このように、銅版画主流の時代が長く続き、新たに石版画や鋼版画などの技術が次々と導入されたヨーロッパ芸術界において、精巧さで劣る木版画は脇に追いやられていた。19 世紀に入っても出版用の挿絵としては、未だ銅版が主役の座にあった。ただしこの頃から、西欧市民社会における識字率や知識欲の高まりを受けて、大量の刊行物を迅速に印刷する必要性が生じていた。1825 年頃から銅版よりも量産能力の優る鋼版が多く使用されるようになるのは、まさにそのためである。とはいえ、凹版（銅版画）や平版（石版画・鋼版画など）ではどうしても越えられない印刷技術上の壁があった。つまり、一つの紙面に活字と挿絵を同時に並べて印刷するためには、挿絵を活字と同じ版、すなわち凸版で制作しなければならなかったのである。そこで、1840 年頃から凸版であった木版画が再び注目を浴びようになる。木版は銅版や平版に比べ耐久性、彫版上の自由さ、精確さにおいてはるかにひけを取るものであったが、一度の手間でテキストと挿絵を同時に刷ることが可能であるという利便性があり、何よりも低コストであった¹⁶。一般の書籍とは異なり、短時間に大量の紙面を印刷しなければならない新聞社にとっては、この木版画の活用こそが絵入り新聞で成功するために絶対不可欠の要素であった¹⁷。なお、この木版画復興の陰には、18 世紀末のイギリスにおける版画技術「革命」があったことを付け加えておく¹⁸。

こうして、19 世紀中頃から西欧の出版・印刷業界では挿絵用の木版画が脚光を浴びるようになった。1840 年代に始まる絵入り新聞の興隆は、以上のような木版画の復興を背景としていたのである。前述の『ベニー・マガジン』のアイディアが、翌年には『プフェニヒ・マガジン』としてドイツでも取り入れられていたように、イギリス出版界の流行は、ドイツ圏にもすぐに伝播した¹⁹。

1842年創刊の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の成功は、LIZ 刊行の直接的な契機として働いたといえる。

では、このように迅速かつ大量に印刷可能となった挿絵を新聞に盛り込むことによって、ヴェーバーは何をめざしていたのであろうか。以下では、LIZ 創刊時の言葉に示された新しいメディアとしての意図と方向性を手がかりに、ヴェーバーが描いた絵入り新聞としての理想像を探ってみたい。

2. 『ライブツィヒ絵入り新聞』の掲げた理想

(1) 家庭誌としての『ライブツィヒ絵入り新聞』

18世紀後半以来、ドイツ社会において書籍や定期刊行物の発行が相次ぐが、一般向けの日刊紙が普及する前のこの時代において、定期刊行物の中心は雑誌であった²⁰。前述した『プフェニヒ・マガジン』は、1833年に創刊されるや年内に3万部以上を発行し、ほどなくして10万部を超える成功を収めた。このような定期雑誌における読者拡大の傾向を受けて、19世紀中葉になると、娯楽メディアとしての家庭雑誌の刊行が目立ち始める。1852年にライブツィヒのブロックハウス社から創刊された『ウンターハルトゥンゲン・アム・ホイスリッヒェン・ヘルト』(Unterhaltungen am häuslichen Herd, 『わが家の娯楽』)は、政治や文学批評、宗教論議といったものを排除した娯楽・啓蒙誌として、創刊翌年には発行5千部に達した²¹。また、1853年にライブツィヒのエルンスト・カイル(Ernst Keil)が世に出した『ガルテンラウベ』(Die Gartenlaube, 『あずまや』)は、当初ユーモア性のある政治誌の付録としてスタートし、2年後に独立雑誌となったものである。前記ブロックハウス社の雑誌と異なり、読者を知識階級に限定せず、文芸や科学といった領域に重点を置いていた。投書を活用して読者の愛好対象を探る努力やイラストの積極的な活用が実を結び、創刊年に5千部だった同誌の発行部数は、1875年には38万2000部にまで伸張していた²²。その他、19世紀中頃に創刊され成功を収めた家庭雑誌としては、『ダーハイム』(Daheim, 1864年)、『イラストリルテ・ヴェルト』(Illustrierte Welt, 1853年)、『ユーバー・ラント・ウント・メーア』(Über Land und Meer, 1858年)、『ダス・ブーフ・フュア・アレ』(Das Buch für Alle, 1864年)などが挙げられるが、これらの家庭雑誌が好評を博した要因は、豊富な挿絵の存在にあったと見ることができる²³。それゆえ、1830-40年代に挿絵入り定期刊行物として成功を収めた『プフェニヒ・マガジン』やLIZは、流行の火付け役であったと見ることができる。

とはいえLIZは、その名のとおりの週間「新聞(Zeitung)」であり、厳密には上記の各家庭雑誌とは区別されるものかもしれない。ただ、ヴェーバーを中心とするLIZ編集部が、当初から家庭誌としての方向性を意識していたことは、その創刊の辞からうかがえる。1843年7月1日創刊号の巻頭では、“Was wir wollen”(「我々が意図するもの」)というタイトルで、LIZの刊行目的、ならびに大衆メディアとしての決意の表明がなされている²⁴。なかでも、対象とする読者層として「成人男性」の他に「女性」と「青少年」を挙げている点は注目に値する。そこではまず、国内外の絵入り小説や物語、エレガントなスケッチを添えた最新流行レポートなど、女性の関心の高いジ

ジャンルを取り上げていくと予告している。また、カリカチュア、言葉遊び、なぞなぞ、言葉あてゲーム、チェスの問題といった若年層でも楽しめるコーナーをもうけることも示唆している。この青少年向けという点では、単なる娯楽の手段という枠を超えて、教育的効果すら視野に入れていたことは、LIZ が自己の社会的使命をどのように認識していたかを考える上で興味深い²⁵。

そして、この創刊の辞を締めくくるにあたり、LIZ は自己の理想像を以下のように表明している。

我々は、成人男性には最も根本的な啓蒙を、女性にはきわめて心地よい娯楽を、そして青少年には豊かで活動力旺盛な生活をする上で強力な刺激となるものを提供するつもりである。我々はどこの家庭にも欠くことがなく、いかなる成員にも喜んで迎え入れられることこの上ない報告をもたらす、そんな書籍 [Buch] でありたい。つまり、最大規模の都市から人里はなれた極めて小さな村に至るまで愛読者を抱え、新しい、ないしは有益な、もしくは快く感じるものを見出さないままその手から離してしまうような読者がいない、そんな本でありたい²⁶。

このように、「新しさ」「有益性」「娯楽性」を柱として、なおかつドイツ各地の各層を対象にしていた点に LIZ の斬新さがあった。1843年の末日、半年分の全号を1冊に合本化する際の巻頭の言葉でも、LIZ はこの家庭誌としての自己の方向性を再確認している。

我々の努力は以下のことに向けられた。つまり、有用性と美を結びつけ、楽しんでなおかつためになる娯楽を好む、そういう家庭のための家庭誌をつくることであり、数多く寄せられた共感が、まさにこの目的の達成について我々に完全な安堵を与えてくれたことを我々はうれしく思う次第である²⁷。

以上のことから、ヴェーバーは家庭雑誌の将来性をはっきり認識していたといえる。大人から子どもまで、さらには大都市から小村に至るまで幅広い愛好者を獲得するためには、何よりも豊富な挿絵の存在が欠かせなかった。そしてその挿絵の定期刊行物への大幅な導入が可能になった今、家庭の定期愛読書を世に出し、社会に貢献するとともに出版業者としての自らの成功を導く、そんなヴェーバーの先見性と野心がここでは確認できる。

(2) 大衆メディアとしての『ライブツィヒ絵入り新聞』

これまでの LIZ の論調を見る限りでは、同紙は「家庭誌」として自己を位置づけていたように思える。しかし、B4 版16ページを基調としたその体裁は、まさしく当時の新聞そのものであった。内容においても、時事ニュースが頻繁に取り上げられているように、週間新聞としての本質を備えていた。LIZ の「新聞」としての側面を浮かび上がらせるために、創刊の辞の別の箇所にも目を移してみよう。

この時代、挿絵としての木版画が見直され、さまざまなジャンルの出版物への活用が進んでいたことはすでに述べたとおりである。LIZ の絵入り新聞としての出発も、当時のこのような潮流を強く反映したものであったことは、その創刊の辞からもうかがえる。

日常の出来事に具象的な解説を添え、絵と言葉の融合によって現在をはっきりと目に見える形で浮かび上がらせるために、——その具象性が現在に対する関心を高め、理解を容易なものにし、多くのものに対する回想をより豊かかつ快適なものにするであろうことを我々は望む——木版画と印刷機の密接な結合を利用しようと思いついた次第である²⁸。

すなわち、世間の出来事を伝える新聞紙面のなかで、対象を具体的に、誰にでも理解しやすい形で提供することが、LIZのメディアとしてのねらいであった²⁹。しかもそれは、従来の媒体とは異なり、情報を目で見える形で伝達し、一目瞭然の形で読者にもたらしことを意図したものであった。

たとえ完全に周知の世界での出来事であっても、王侯の偉業から人目につかない場所での研究の成果に至るまで、それが一般の関心に供するものでありさえすれば、我々は読者諸氏に週間ニュースの形態で提供するつもりであり、この具象的な描写からより正確な理解ないし生き生きとした印象をもたらし上で必要なものを、できるだけ忠実な、かつ入念に作成された木版画において、読者諸氏の目の前にもたらし予定である³⁰。

このように、ヴェーバーが絵入り新聞の発行でめざしていたのは、単なる娯楽手段の提供や利益の追求にとどまるものではなく、その背後には、メディアに携わるものとしての使命感があったことも見逃してはならない。しかもそれは、一部の知識層の読み物ではなく、広い層を対象にした大衆メディアとしての使命感であり、その実現を可能にしたのが、挿絵の活用であった。この「大衆教育の手段としてのイラストレーション³¹」は、一方では「見る」教養・娯楽雑誌としての可能性を広げるものであった。他方で、ドイツやヨーロッパ、あるいは全世界から送られてくる情報に絵が添えられることによって、人々はその情報に具体的なイメージを抱くことができた。新聞がビジュアル的であるのは当たり前で、映画やカラーテレビ、写真入り雑誌やインターネットなどさまざまな視覚媒体が並存している現代とは異なり、当時の大多数の人々は、世界中から送られてくるニュースを活字のみで理解しなければならなかった。多くの書籍を購読することで、思考やイメージをめぐらせることに日頃から慣れ、高価な挿絵入り書籍でそれを補うことができたのは、一部の教養市民層に限られた。また、当時は科学が急速に発達し、これまで思いもしなかったような新発見、新技術が次々と生まれ、そのうえ西洋人が世界中へ進出するとともに、未知の世界の情報が続々と押し寄せた。そしてこのような時代に、メディアに携わる者として人々に何を伝えなければならないのか、どのようにしたらうまく伝わるのか。ヴェーバーがこの問題に真剣に向き合っていたことは、LIZの創刊号からはっきり読み取れる。

では、そもそも伝達する側、つまりLIZは物事を客観的、ありのままに伝えることができたのだろうか。記事の傾向はもちろんのこと、掲載された挿絵が読者に与えるインパクトの大きさを鑑みるならば、送り手のバイアスの問題は重要であろう。ヴェーバー伝の著者によると、LIZの編集方針はヴェーバー自身に由来しており、自由主義（とりわけ言論の自由）運動への共鳴、ドイツ統一への希望、ただしいずれの問題においても暴力的な解決には反対といった彼の思想は、LIZの論調にも反映していたという³²。そのため1848年革命において、ヴェーバーは国民自由主義の動き

に共感を持ち、一つの通貨・郵便・軍隊・議会を有する連邦国家（一種の「ドイツ合衆国」“Vereinigte Staaten von Deutschland”）を頭に思い描いていたといわれている³³。たしかに LIZ は、いかなる利己的な目標からも距離を置き、党派に縛られないこと、唯一の基準を公正と真実に置くことを創刊号で宣言し、その後も非党派性・公正な報道の原則を改めて強調している³⁴。しかしこのことは、世論の形成というジャーナリズムの使命から完全に決別し、政治的な意思表示を放棄することを意味していなかった³⁵。

以上のように、これまでは LIZ 創刊の背景、ならびに創刊号における LIZ の意思表示を中心に見てきた。これら創刊時の「理想」や方針がその後も貫かれていたかどうかを確認するためには、同紙のその後に触れる必要があろう。とはいえ、LIZ 百年の変遷を追うには、この小論では限界がある。そこで次節では、1850年代末のオーストリア帝国の世界周航を事例として取り上げ、この出来事に対する LIZ の報道を通じて、「理想」に対する「現実」の部分を見ていきたい。

3. LIZ に映し出されたノヴァラ号遠征

(1) LIZ におけるノヴァラ号の登場

1857年4月30日、オーストリア海軍の帆走フリゲート艦ノヴァラ号がトリエステ港を出航し、世界一周の旅に出た。乗組員352人を乗せたこの航海の最大の目的は、世界各所の科学的調査にあった。大西洋に出たノヴァラ号は、僚艦カロリーナ号とともに最初の目的地ブラジルへ向かった。そこから単独航海を開始したノヴァラ号は、アフリカ南端の喜望峰を迂回し、インド洋のいくつかの島に立ち寄った後、北上してセイロン島に到達した。セイロン島、マドラス、ニコバル諸島の現地調査を進めた後、マラッカ海峡を通過してシンガポールに寄港、その後バタヴィア、マニラ、香港、上海といった東アジアの各地をまわった。暴風雨と闘いながら太平洋を南下したノヴァラ号がオーストラリアのシドニーに到着したのは、トリエステを出航して1年半後のことであった。そこから針路を東にとり、ニュージーランドのオークランド、タヒチを経て、南米チリに達する。そしてこのとき、母国オーストリアがサルディニアと戦争間近にあることを知り、南米大陸の調査を打ち切って帰国の途に着く。南米出発の時点において、すでにヨーロッパではフランス、サルディニアとの戦争は始まっていたが、ナポレオン3世によってノヴァラ号の安全は保証されていた³⁶。そのような事実をまったく知らない遠征隊は、フランス海軍の急襲を恐れつつ帰路を急ぎ、1859年8月26日、トリエステに帰港した。最後は戦争によって計画の変更を余儀なくされたが、この遠征で得られた成果は大きく、ノヴァラ号に対するオーストリア人の誇りは今日でも根強いものがある³⁷。

なお、ノヴァラ号遠征の様子や成果については、帰港の数年後に出版された旅行記で国民にも広く伝えられた³⁸。この3巻本は、随行者学者シェルツァー（Karl von Scherzer）が旅行中の各種の記録に基づいて執筆したもので、一般向けの旅行記、科学・教養書として好評を博した。より具体的な研究成果については、各分野別に編纂された全21巻のシリーズ本に盛り込まれ、当時の学術研

究に多大な貢献をもたらしたものとして世界的に評価されている³⁹。

ノヴァラ号がこのような世界周航に旅立った時期は、LIZの創刊から15年目にあたる。同紙は創刊当初から売り上げを伸ばし、数年後には1万部を発行するまでに成長していた⁴⁰。とはいえ、材料や人材、とりわけ資金面で不安を抱えたまま出発していた絵入り新聞事業は、創刊から数年後に経営上の危機に陥っていた。コスト高を抑えるための努力や友人の助けを借りることにより、ヴェーバーはこの危機をなんとか乗り切り、LIZの発行は継続されたのである⁴¹。また、1855年頃からヨーロッパ各国・各地域に専属の画家を抱えるようになり、大国間の戦争が頻発し始めるこの時代、前線の戦争画家から送られてくる臨場感あふれる挿絵は、LIZの読者を惹きつけた⁴²。設備面においても、1858年から60年にかけて新たなアトリエや印刷所を獲得し、さらには、作業場をより立地条件のいい場所へ移転するなど、事業の拡大が進められた⁴³。このように、1850年代後半はLIZの事業拡張期にあたり、ノヴァラ号から寄せられる世界各地の情報は、LIZ紙面の一層の充実化に寄与するのであった。

LIZでノヴァラ号の世界一周に関する特集が始まるのは、1857年6月6日付の紙面からである⁴⁴。「ノヴァラ号の世界一周」と題する記事の冒頭では、この事業に対する世間の注目度の高さ、目的、最初の針路・行き先などに触れた後、フリゲート艦ノヴァラ号の性能や艦内の構造が紹介されている。とりわけ積み込まれた搭載物資の記述は細かく、長期航行への備えがどのようなものであるか明らかになる。記事ではさらに、司令官ヴュラーシュトルフ・ウルバイル（Bernhard Freiherr von Wüllerstorff-Urbair）を筆頭に乗艦将校の名前が列挙され、その後に随行研究者と各人の役割についての紹介が続く。また、彼らの研究活動のために用意された機材の名称や数に関する記載も詳細をきわめ、この遠征がいかに科学調査を重視したものであるかを示している。それをさらに裏付けるものとして、帝国科学アカデミーをはじめとする帝国内のさまざまな学術研究機関、ならびに自然科学研究の大家A. フンボルトから調査の指針を与えられている事実が挙げられている。LIZ自身のこの科学的大事業に対する期待は、以下の言葉に表れている。

それらのすばらしい道具を携えて、ノヴァラ号は今、遠方の大陸へ舵を取った。光栄ある壮大なミッションのもと。その輝かしくも困難な任務が無事に片付き、何年にもわたる苦勞の航海の末、我ら共通のドイツ祖国の榮譽と名声をもたらすあらゆる種類の科学の宝を積んで帰還しますように！⁴⁵

ここで、LIZがこの遠征を単にオーストリア一国のみならず、ドイツ民族全体の問題として取り上げていることは重要である。ドイツ統一をめぐる議論が活発化し、オーストリアとプロイセンの主導権争いが激化していた当時の時代状況を考えるならば、オーストリアのこの大事業が持つ意味はおのずと明らかであろう。これに続く記事の最後では、4月30日のトリエステ出航から地中海へ向かう航海の様子が語られている。シチリア島沖での曳航蒸気船との別れのシーンが印象的に描かれ、神の恩寵と旅の成功への祈りをもって、LIZはこの記事を締めくくっている。

さて、ノヴァラ号の出発を扱ったLIZのこの記事には、4枚の関連する挿絵が添えられている。



図 1

図 2



図 3

特集の最初のページに登場する人物画は、オーストリア海軍の総司令官であり、今回の遠征の推進者であったマクシミリアン大公（Ferdinand Maximilian, Erzherzog von Österreich）を描いたものである（図1）⁴⁶。2枚目と3枚目は、ノヴァラ号の艦内の部屋の様子を示すものであり、遠征隊司令官ヴェラーシュトルフ・ウルバイルの執務室（図2上）と乗組員の食堂（図2下）が挙げられている⁴⁷。最後の4枚目は、ノヴァラ号（図3正面左）の出発時の光景を描いたものであり、別任務で南米まで同行することになっていたコルベット艦カロリーナ号の姿も右端に見られる（図3）⁴⁸。

（2）ノヴァラ号世界周航に関する LIZ の連載

LIZで「ノヴァラ号の地球一周」の続報が登場するのは、1858年1月2日付の紙面であった⁴⁹。前述の1857年6月6日付の記事のなかで、LIZはノヴァラ号の遠征隊員から直接報告を受けることを予告していたが、報告を依頼した人物の名前に関してははっきり述べていない⁵⁰。また、報告者が単独か複数かも判然としないが、添えられた挿絵がすべて随行画家ゼレニ（Joseph Selleny）のものであったことは、各号で明記されている⁵¹。1月2日付のこの号に掲載されているリポートは、ジブラルタル報告（1857年5月28日）とリオ・デ・ジャネイロ報告（同8月14日）であるが、双方ともリオ・デ・ジャネイロから一括して発送されたものであった。前者の報告では、現地のイギリス総督による歓迎の様子が記され、とりわけイギリス女王の誕生日を祝う式典・舞踏会の模様が伝えられている。この報告で注目すべきは、「総督の特別命令」により、ノヴァラ号の科学者たちの現地調査・収集活動に大きな便宜が与えられたと報じている点である。これ以降も世界各地の英領寄港地でノヴァラ号の研究活動に対する現地イギリス人の温情と支援が続き、また、前述したようにイタリア統一戦争中、フランス政府はノヴァラ号の安全航海を保証した⁵²。世界がノヴァラ号をどう見ていたか、つまりいかに世界がこの遠征に期待を寄せていたかを読者はジブラルタルの報告から最初知ることになった⁵³。

一方のリオ・デ・ジャネイロ報告では、ノヴァラ号の艦内の様子について触れられており、とり

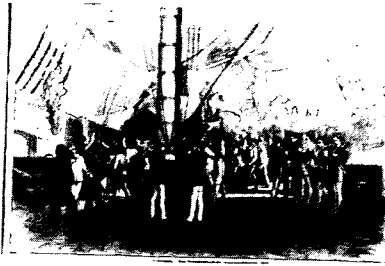


図 4



図 5



図 6

わけ朝の掃除や甲板の洗浄の重要性を指摘している。この1月2日付の紙面では、「ノヴァラ号の地球一周：7月15日の赤道通過J. ゼレニの原画に基づいて」と題する一面全体を使った挿絵が添付されている（図4）⁵⁴。この図からは、ノヴァラ号甲板上での船員たちの生き生きとした様子が伝わってくるが、本文記事との関連性は判然としない（赤道通過の話は本文には出てこない）。

リオ・デ・ジャネイロ発の報告記事は、複数号にまたがっており、翌週1月9日付の紙面にその続きが掲載されている。この「ノヴァラ号の地球一周」の第3回は、前回と同じく艦上における朝の情景（掃除、朝食など）が取り上げられ、乗組員の衛生・健康に関する内容が続いている⁵⁵。さらに話題は、ノヴァラ号に同行した研究者グループの日常に移る。彼らの艦内での研究活動やその部屋の様子が記され、報告者は具体的イメージを喚起するためにゼレニのスケッチを提示している（図5下）⁵⁶。このスケッチが添えられることにより、読者は地質学者ホッホシュテッターの研究室や機材の様子を想像することができたであろう。またそれ以外にも、この号では司令官ヴュラーシュトルフ・ウルバイルの執務室（図5上）と甲板上での舞踏会を描いた挿絵（図6）が大きく掲載されている⁵⁷。

1月16日付「ノヴァラ号の地球一周」の第4回は、単調な日常生活に気分転換をもたらしてくれるものとして、艦内の日曜礼拝の記述で始まっている⁵⁸。添えられた挿絵からは、即席の祭壇の前にいる従軍司祭と、司令官をはじめ数十人がこの礼拝に参加している様子が伝わってくる（図7）⁵⁹。同様に、平凡な日常から逸脱し、「その瞬間、あらゆる規律や上下関係が投げ出され、冗談と悪ふざけが優位に立つ」特別な行事として、7月14、15両日に行われた赤道通過時の艦上セレモニーの様子がかなり細かくレポートされている。つまり、前述の1月2日付紙面に登場した挿絵（図4）は、このときの光景を写したものであり、中央右側で王冠をかぶった男性が海神ネプチューンを演じていたことが判明する。この号ではさらに、リオ・デ・ジャネイロ到着（8月5日）と現地滞在時の遠征隊の行動記録が続いた後、遠征隊司令官ヴュラーシュトルフ・ウルバイルの出自と経歴が細かく紹介されている。そこでは、司令官としての彼の資質が称賛され、最後の部分では遠征隊幹部や医師、同行科学者の名前を挙げて、彼らの勇姿をゼレニの挿絵で表している（図8）。



図 7



図 8



図 9

以上のリオ・デ・ジャネイロ発の報告では、ジブラルタルやブラジルでの滞在の様子ももちろん描かれているが、重点が置かれていたのは大西洋航行中の艦内の様子であった。ノヴァラ号の艦内がどのような仕組みになっているか、乗組員たちが洋上でどのような日常生活を送り、退屈さを紛らわすためにどのような工夫を凝らしているか、文章と豊富な挿絵を通じて、読者はこの情景を頭に浮かべたことであろう。これ以後 LIZ に掲載される挿絵は、一転して寄港地の景色や現地の人々の暮らしぶりを伝えるものを中心となり、寄港地や洋上でのノヴァラ号の様子、あるいは隊員の日常を映すイラストは現れない⁶⁰。

こうして始まったノヴァラ号からの現地報告は、「ノヴァラ号の世界周航」という連載タイトルのもと、その後約 2 年間（不定期）にわたって LIZ 紙上に掲載される。そこに添えられた挿絵は、アジア・太平洋地域における各地の景観や現地人の姿、習俗といったものを題材にしたものが中心であった。ここではそれらの絵をすべて並べることができないので、読者の目の前でどのような光景が展開されていたかは、表 1 を参照してその全体像をつかんでいただきたい。

最後に、この連載が当時のドイツ連邦の政治状況のなかで持ちえた意味について指摘しておきたい。連載当初、LIZ 紙面にはオーストリア帝国の軍艦ノヴァラ号、そしてそれに乗艦したオーストリアの軍人や学者が映し出された。また、その後同紙で掲載が続いた遠方世界からの最新情報は、イギリス人やフランス人からではなく、同胞であるドイツ人（オーストリア人）からもたらされたものであった。このことは、国家としての世界進出に遅れをとっていたドイツ民族にとって重要な意味を持っていた。つまり、統一国家を志向しながらも未だ領邦国家の寄せ集めであったドイツ連邦のなかであって、「世界の大海原でドイツ民族の舵を取るオーストリア」というイメージを植えつけることにつながったのではなかろうか⁶¹。「我ら共通のドイツ祖国の榮譽と名声」という表現を用いた前述の LIZ の論調からも分かるように、当時のドイツ人の多くは、これがオーストリア一国のみならず、ドイツ民族全体に関わる問題であるという認識を持っていた⁶²。そしてこのドイツ民族全体の大事業の牽引役として、盟主オーストリアがクローズアップされた。ノヴァラ号の活

表1 LIZのノヴァラ号世界周航関連記事（LIZ紙面をもとに筆者が作成）

年	月・日	Nr.	「ノヴァラ号の世界周航」シリーズ表題	挿 絵 表 題	サイズ
1857	6・6	727	「ノヴァラ号の地球一周」	「オーストリア海軍提督・海軍総司令官フェルディナント・マックス大公」	中
				「オーストリア帝国フリゲート艦ノヴァラ号の地球一周遠征最高指揮官、ヴェラーシュトルフの司令官執務室」	中
				「オーストリア帝国フリゲート艦ノヴァラ号の食堂」	中
				「オーストリア帝国フリゲート艦ノヴァラ号の出航」	大
1858	1・2	757	「ノヴァラ号の地球一周 2」	「7月15日の赤道通過」	大
	1・9	758	「ノヴァラ号の地球一周 3」	「帝国フリゲート艦ノヴァラ号の船内にあるヴェラーシュトルフ司令官の執務室」	中
				「帝国フリゲート艦ノヴァラ号の船内にある物理・地質学者ホッホシュテッターの船室」	中
				「帝国フリゲート艦ノヴァラ号の甲板上での舞踏会」	大
	1・16	759	「ノヴァラ号の地球一周 4」	「帝国フリゲート艦ノヴァラ号の読書室」	中
				「帝国フリゲート艦ノヴァラ号での礼拝」	中
				「遠征の指揮官、幕僚、学者たち」	大
	4・10	771	「5 ケープ植民地内陸部への小旅行」	「ケープ植民地におけるかつてのベインズ峡谷」	中
				「ステレンボスにおけるケープ植民地志願兵団のパーティー」	小
				「ケープ植民地における現在のベインズ峡谷」	中
				「ケープ植民地ブレード川沿いの景観」	小
	4・17	772	「5 ケープ植民地内陸部への小旅行」	「ケープ植民地ザンドブリート近郊のシク・ヨゼフの墓標」	中
				「ケープ植民地のヘルンフォート派居住地域グナデンタール」	中
				「シク・ヨゼフの墓の内部」	小
				「ケープ植民地グナデンタール近郊のホッテントットの小屋」	小
				「ケープ植民地ブランド溪谷の温泉」	中
	8・7	788	「6 インド洋におけるセント・ポール島とアムステルダム島」	「インド洋セント・ポール島における死火山の火口盆地と北西側の四つの小火口」	大
				「セイロン島プワント・ド・ゴール近郊の仏教寺院」	中
				「セント・ポール島における雨の日」	中
	8・14	789	「6 インド洋におけるセント・ポール島とアムステルダム島」	「ニコバルのナンカウリにあるイトエ村」	中
				「セイロンにあるインド邸宅の内部」	中
				「ニコバルのパンダヌスの森」	中
				「マドラスの南30マイルにあるマハマライブラムもしくは聖なる山」	中
	8・21	790	「7 セイロン島におけるプワント・ド・ゴールとコロンボ」	挿絵なし	
	8・28	791	「7 セイロン島におけるプワント・ド・ゴールとコロンボ」	挿絵なし	
	9・11	793	「8 マドラスへの上陸と滞在」	挿絵なし	
	10・9	797	「9 マドラスからベロールへの小旅行、マドラスでのさらなる滞在」	挿絵なし	
	10・16	798	「10 マドラスの7つの仏塔を訪問」	「マハマライブラムのモノリティ仏塔におさめられたガネザ像」	小
				「マハマライブラムのモノリティ寺院に掲げられた薄肉彫刻」	小
				「マハマライブラムのモノリティ寺院付近にいるシェルツァー博士と画家ゼレニ」	小
				「マハマライブラムのモノリティ寺院の入り口」	小

表1 LIZのノヴァラ号世界周航関連記事（LIZ紙面をもとに筆者が作成）（つづき）

年	月・日	Nr.	「ノヴァラ号の世界周航」シリーズ表題	挿 絵 表 題	サイズ
1859	1・29	813	「バリ島」（1858年11月18日シドニーより）	「ニコバルのある小屋の内部」	中
	2・5	814	「ニコバル諸島滞在」	挿絵なし	
	2・12	815	「ニコバル諸島滞在」	挿絵なし	
	2・19	816	「ニコバル諸島滞在」	挿絵なし	
	2・26	817	「ニコバル諸島滞在」	「シンガポールにおける大規模中国寺院の内部」	中
	3・5	818	「シンガポール」	「バタヴィアのウェルテヴレーデン運河沿い」	中
				「バタヴィア近郊のボイテンゾルフにおけるジャワ人区域」	中
	4・2	822	「ジャワ島への航海」	挿絵なし	
	4・9	823	「ジャワ島への航海」	「ジャワ島におけるゲデー火山火口」	中
				「ジャワのバングランゴに向かう途上の森林遠足」	中
	7・2	835	「ジャワ島への航海とマニラ滞在」	「司教座教会があるマニラ中心地」	中
				「ラグナ湖、マニラにある魅惑的な湖」	中
				「マニラからの市場の風景、スペイン系メスティソ、タガログ系メスティソ、中華・タガログ系メスティソ」	中
	7・9	836	「香港」	「幸せの溪谷、香港ハッピー・バレー」	中
				「香港の通りにいる中国人の易者」	中
	7・16	837	「マカオ」	「マカオのプロテスタント教会墓地」	中
				「マカオにあるバゴダの杜」	中
	7・23	838	「上海」	「上海の中央通り」	中
				「上海のティー・ガーデン」	中
	7・30	839	「上海」	「上海のロン・ファ仏塔」	中
1860	1・21	864	「清国からオーストラリアへ」	「カロリン諸島ボンベイ島のクック宣教師宅」	中
				「カロリン諸島のボンベイ島の男女」	中
				「カロリン諸島のボンベイ島における原住民の小屋」	中
	1・28	865	「清国からオーストラリアへ」	「オーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズのウロンゴング」	中
				「オーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズの原住民の小屋」	中
				「スチュアート諸島の原住民の小屋」	中
				「スチュアート諸島の原住民の一群」	中
				「オーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズのジョン・ミッチェル脚絆」	中
	2・4	866	「シドニーを出立、ニュージーランド訪問」	「ニュージーランド、マンガタウィリの戦士と妻」	中
				「ニュージーランド、ワイカト川の景色」	中
				「ニュージーランド、マンガタウィリの村」	大
	2・25	869	「タヒチへ、そしてタヒチで」	「タヒチにおけるファタウアの滝」	中
				「タヒチにおけるボマレ女王の宮殿」	中
				「タヒチ女王陛下ボマレ」	中
				「タヒチの風景」	中
	3・3	870	「バルバライソ、ホーン岬を経てトリエステへ」	「サンディアゴの独立広場」	中

※現地語に基づく地名や建物などの固有名詞は、そのままアルファベット読みで日本語表記した。

挿絵のサイズの目安は以下の通りである。

大：紙面一面、もしくはおよそ一面 中：紙面半分程度 小：紙面四分の一程度もしくはそれ以下

躍と成果を伝える LIZ の視覚的報道は、オーストリアの海軍力とオーストリア人の勇敢さ、学術研究の領域におけるオーストリアの栄誉を目に見える形でドイツ人に伝えていたといえるだろう。

とはいえ、ノヴァラ号現地報告の連載が続いていた最中、プロイセンの東アジア遠征艦隊の記事、ならびに挿絵が顔を見せるようになる事実を見逃してはならない（図 9）⁶³。この新連載「東アジア海域へのプロイセン艦隊の遠征」は、「ノヴァラ号の世界周航」と数号にわたって同時掲載され、後者の連載終了後も約 2 年半（全 10 回）にわたって連載を続けた。また、プロイセン遠征の同行画家ハイネ（Wilhelm Heine）による挿絵付報告記事「ベルリンから日本へ」の連載も同時に始まり、以後数年にわたり世界の最新の様子を映し続けた⁶⁴。今や LIZ 読者の視線は 4 隻からなるプロイセン艦隊に移り、そこから送られてくる世界の最新の光景が、LIZ 紙面で展開されることになるのである。

おわりに

本稿では、これまでわが国で関心を向けられることのなかったドイツ最初の絵入り新聞 LIZ を取り上げた。ヴィクトリア時代初期のロンドンで、挿絵入りの画期的な新聞が登場したそのわずか翌年、同様の試みがドイツでも始まっていた。このアイディアが即座にドイツに取り入れられた背後には、ヨハン・ヴェーバーという「賢明で天賦の才に恵まれた人物⁶⁵」がいた。挿絵の可能性に早くから関心を持ち、先見性と実行力をそなえていたこの先駆者の存在を無視して、絵入り新聞がこの時期にドイツに誕生した理由を説明することはできない。

とはいえ、絵入り新聞の出現と発展を個人の資質のみで説明付けるのも無理であろう。木版画技法の進歩や印刷の高速化といった技術革新が、絵入り新聞の誕生を可能にしたことはすでに述べた。そして技術革新は、単に出版分野に限らず、当時の西欧社会全体を覆うものであった。この技術革新が引き起こした 19 世紀の資本主義化の流れは、社会における市民層の増加をもたらす。ここで登場する市民層とは、単に経済的な市民層（ブルジョア）を指すのではなく、教養市民層も含む広範なものであり、行政主導型国家のもとでは後者の方が社会的ステータスは高かったといえる。また、上層から下層に至るまで、各市民層は自己より上の文化規範に憧れを抱いており、知的、文化的な上昇志向を持っていた⁶⁶。このような教養や知識を求める市民の増加は、挿絵付きの分かりやすい刊行物に対する需要を高めたのであり、技術の進歩や事業の拡大により、これに応えるだけの供給体制も構築されていった。産業革命、資本主義経済、市民社会への移行、これら 19 世紀を象徴する現象が絵入り新聞誕生の裏にあったということをここでは強調しておきたい。

そして、新しい視覚媒体として登場したこの LIZ が何をめざしていたかについても本稿では検討の対象にした。その理想の姿とは、成人男性、女性、さらには青少年に至るまで、どのような年齢層をも惹きつけ、どこの家庭にも据え置かれる家庭誌としての存在であった。しかしまた、挿絵は人々を楽しませるだけではなく、ニュースを伝える上でも、これまでになく大きな可能性を秘めていた。

LIZは家庭誌・大衆メディアとして、「新しさ」「娯楽性」「有益性」「具象性」といったテーマを掲げていた。ノヴァラ号の遠征隊員に移動特派員としての使命を託していたLIZは、ノヴァラ号が寄港した各所から送られてくる現地の情報や、ゼレニの写し取った情景を即座に紙面に反映させることができた。そのため読者は、世界の最新の状況を目にすることができたのである。

娯楽性という観点では、自由に海外へ行くことができなかった当時の人々にとって、ノヴァラ号によって映し出される遠く離れた世界の光景は、驚きとともにワクワクした気分を起こさせるものであったのではないか⁶⁷。写真や映像、あるいは直接の体験により、地球の隅々の様子を知っている（あるいは知った気になっている）現代の我々よりはるかに敏感に、LIZ読者はそれらの挿絵に接していたであろう。こうした疑似体験は、老若男女の想像を逞しくし、読者は心を躍らせていたと考えることができる。

挿絵はまた、読者が自分の知らない世界について知り、具体的なイメージを形成する際に、大きな助けとなった。これらの未知の世界の情報は、直接日常生活に役に立つものではなかったとしても、教養ある市民となるためには必須のものであった⁶⁸。挿絵をふんだんに紙面に載せることができたのはLIZの強みであり、ノヴァラ号連載に関する限り、LIZのこの強みは活かされており、総じて、家庭誌・大衆メディアとしての理想に近い形であったと判断することができる。

本稿では、創刊号で掲げられたLIZの理想や方針が、どの程度その後の紙面に反映されていたかを見るために、ノヴァラ号遠征の描写を事例として取り上げた。もちろんこの問題を一つの連載記事だけで解明するには限界があろう。また、LIZが刊行を続けた百年の間に、ドイツ社会は数々の大きな変化を経験した。LIZがドイツ（あるいは世界）のこの百年をどのように映し出していたか。さらには、社会や政治の状況が変化することにより、LIZ自体にどのような変化が見られたか。英仏系絵入り新聞に対するアプローチと同様の研究が求められる⁶⁹。

註

¹ ウィリアム・アイヴィンス著、白石和也訳『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』晶文社、1984年、107頁。

² 金井圓編訳『描かれた幕末明治 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース日本通信1853-1902』雄松堂書店、1973年。The Illustrated London News 刊行会編、*The Illustrated London News. Reprint ed.*、柏書房、1997年一。横浜開港資料館編『「イリュストラシオン」日本関係記事集 1843-1905』全3巻、横浜開港資料館、1986-90年。小倉孝誠『19世紀フランス 夢と創造：挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる』人文書院、1995年。同『19世紀フランス 光と闇の空間：挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる』人文書院、1996年。同『19世紀フランス 愛・恐怖・群衆：挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる』人文書院、1997年。朝比奈美知子編訳、増子博調解説『フランスから見た幕末維新 「イリュストラシオン」日本関係記事集』から』東信堂、2004年。

³ 今日のドイツ語では、「挿絵入り」という意味の単語は *illustrierte* と表記するが、本稿では当時の表記にならい *illustrirte* とした。

⁴ Koszyk, Kurt, *Deutsche Presse im 19. Jahrhundert. Abhandlungen und Materialien zur Publizistik, Bd.6. Geschichte der deutschen Presse, Teil 2.* (Berlin, 1966), S.285-289.

⁵ Dienstl, Karl, *Die außereuropäischen Fahrten der österreichischen Flotte nach 1848.* Diss., Uni. Wien (Wien,

- 1949). Popelka, Liselotte, *Ein österreichischer Maler segelt um die Welt. Joseph Selleny und seine Aquarelle von der Weltreise der Novara 1857–1859* (Graz/Köln, 1964). Wallisch, Friedrich, *Sein Schiff hiess Novara. Bernhard von Wüllerstorff, Admiral u. Minister* (Wien/München, 1966). Treffer, Günter (Hrsg./Bearb./Komm.), *Karl von Scherzer, Die Weltumseglung der Novara 1857–59* (Wien/München/Zürich, 1973). Hamann, Günther, “Die österreichische Kriegsmarine im Dienst der Wissenschaften,” in: *Revue Internationale d'Histoire Militaire*, N° 45 (1980). Kraus, Carl (Red.), *Der freie weite Horizont. Die Weltumseglung der Novara und Maximilians Mexikanischer Traum: eine Ausstellung des Landesmuseums Schloss Tirol 10.7.–14.11. 2004* (Dorf Tirol, 2004).
- ⁶ Weber, Wolfgang, *Johann Jakob Weber. Ein Beitrag zur Familiengeschichte* (Leipzig, 1928), S.2–10. Wachtel, Joachim (Hrsg.), *Facsimile Querschnitt durch die Leipziger Illustrierte Zeitung* (München/Bern/Wien, 1969) S.6.
- ⁷ 正式名称は, “The Penny Magazine of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge”. 創刊年の末には, すでにその発行部数が20万部に達し, 挿絵入りジャーナリズムの嚆矢といわれる。谷田博幸『ヴィクトリア朝挿絵画家列伝 ディッケンズと「パンチ」誌の周辺』図書出版社, 1993年, 13頁。それ以後, “Penny Magazine” を冠した安価な (通常 3~6 ペンス) 定期刊行雑誌の刊行が続き, 1840年代初頭のロンドンだけで50種類にもわたったが, 多くは短命に終わったという。出口保夫「イギリス定期刊行物と『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』」, 金井前掲書所収, 別冊 1-2 頁。なお, ボサンジェ社がこの英誌を模したことは, その独語正式タイトル “Das Pfennig Magazin der Gesellschaft zur Verbreitung gemeinnütziger Kenntnisse” からもうかがえる。
- ⁸ Koszyk, a.a.O., S.267.
- ⁹ Wachtel, a.a.O., S.6.
- ¹⁰ Weber, a.a.O., S.12.
- ¹¹ この年, 裁判沙汰の末ヴェーバーはヌーラントと決別している。ヴェーバーはすぐに新たな協力者を探し, カール・ロルク (Karl Lorck) という人物がヴェーバー社の共同出資者となった。さらに, 1845年に両者の間で会社を分割し, 書籍出版部門をロルクが, LIZ を含む新聞部門をヴェーバーが引き継いだ。Ebenda, S.12–15.
- ¹² Ebenda, S.15–20.
- ¹³ LIZ 1. Juli 1843 Nr. 1 “Illustrierte Werke im Verlage von J. J. Weber in Leipzig” (Bd.1, S.16). Wachtel, a.a.O., S.6. なお, J.J. ヴェーバー社は刊行初年より半年分の LIZ を一冊に合本しており, 1843 年下半年の第 1 巻から1944年の第203巻までの合冊がある。本稿の執筆にあたってこの合冊を利用したため, LIZ の各記事名のあとに該当する巻の番号とページ番号をそれぞれ付した。
- ¹⁴ Weber, a.a.O., S.32–37.
- ¹⁵ 青木茂監修『カラー版 世界版画史』美術出版社, 2001年, 90–139頁。
- ¹⁶ 谷田前掲書, 14–16頁。
- ¹⁷ Stöber, Rudolf, *Deutsche Pressegeschichte. Einführung, Systematik, Glossar* (Konstanz, 2000) S.113ff.
- ¹⁸ 18世紀末, イギリスのビューイック (Thomas Bewick) は, 銅版画の技法を木版画制作に取り入れた「木口木版」の技術を開拓した。ビューイックは, 種類・性質の上でこれまでとは異なった木材を使用し, さらに小刀から彫刻刀への転換をもたらした。これにより, 出版・印刷の目的に沿いつつも版画としての美しさを失わない新しいスタイルが確立され, この技法は19世紀中葉までにヨーロッパ各地へ広まった。平田家就『ビューイックの木版画』研究社出版, 1983年。黒崎彰『版画史解剖 正倉院からゴーギャンへ』阿部出版, 2002年, 142–144頁。青木前掲書, 140–143頁。Wachtel, a.a.O., S.6–7.
- ¹⁹ 19世紀イギリスの挿絵文化の興隆については, 以下の著作を参照。谷田前掲書。平田家就『イギリス挿絵史 活版印刷の導入から現在まで』研究社出版, 1995年。清水一嘉『挿絵画家の時代 ヴィクトリア朝の出版文化』大修館, 2001年。原英一「ヴィクトリア朝の挿絵メディア」『岩波講座文学 2 メディアの力学』所収, 岩波書店, 2002年。
- ²⁰ 成瀬治, 山田欣吾, 木村靖二編『世界歴史大系 ドイツ史 2 1648–1890』山川出版社, 1996年, 146–151

頁。

²¹ Stöber, a.a.O., S.238-239.

²² シュテーバーは、同誌が発行部数を伸ばした背景として、当時の国民自由主義的風潮に合致していた点を指摘している。つまり、明確な政治的立場の表明を控えながらも、同誌の根本には国民自由主義傾向が見られ、1860-70年代の時代潮流に乗っていたと考えられる。70年代末以降の国民自由党の衰退と歩調を合わせるように発行部数が下降線をたどった事実もそのことを裏付けている。Ebenda, S.239-240.

²³ Ebenda, S.240.

²⁴ LIZ 1.Juli 1843 Nr.1 “Was wir wollen” (Bd.1, S.2).

²⁵ 創刊の辞では、青少年読者に対する方針を以下のように設定している。①精神・心情の健全な発育②祖国の国境を越えた広い視野を持たせ、その広い視野のもと祖国の状態を照らし出させる③快活な行動意欲の活性化と正しい目標・ものさしの保持に貢献④若さみなぎるエネルギーを運動させる場としての役割。Ebenda.

²⁶ Ebenda.

²⁷ LIZ Bd.1 Vorwort (31. Dezember 1843).

²⁸ LIZ 1.Juli 1843 Nr.1 “Was wir wollen” (Bd.1, S.1).

²⁹ LIZ Bd.1 Vorwort (31. Dezember 1843).

³⁰ LIZ 1.Juli 1843 Nr.1 “Was wir wollen” (Bd.1, S.1).

³¹ Wachtel, a.a.O., S.4.

³² Weber, a.a.O., S.68-70.

³³ Wachtel, a.a.O., S.11.

³⁴ LIZ 1.Juli 1843 Nr.1 “Was wir wollen” (Bd.1, S.2)

「党派のあらゆるせわしさを離れて、我々は日々の出来事を大所高所からとらえ、最大限の正確さで描くべく努力してきた。つまり我々は、いかなる偏った描写をも避け、真実・公正という唯一のものさしで人間とその活動を測ろうと努めてきた。絶えず事実だけを叙述し、我々はこれらの事実を純粹かつ開放すべくその覆いからはがし、こうして未来のために現在をきわめて澄んだ鏡のなかに映し出そうと慎重に取り組んできたのであった」LIZ Bd.1 Vorwort (31. Dezember 1843).

³⁵ 同じく創刊の辞において、LIZは抑圧された人々に対する人道的考慮を掲げ、富者に対する貧者、領主に対する被抑圧者を支援することを自らの責務とみなすと公言している。このことは、当時の「大衆貧困」(Pauperismus)という時代状況を強く意識したものであったといえる。LIZ 1.Juli 1843 Nr.1 “Was wir wollen” (Bd.1, S.2).

³⁶ Treffer, a.a.O., S.211.

³⁷ 2004年6月、ノヴァラ号を記念した20ユーロ硬貨が限定販売(5万枚)されている。また、出航150周年にあたる2007年には、同号の航路をたどる世界一周の試みがEU主導で行われる。これは単なるセレモニーのみを意図したものではなく、ノヴァラ号と同じように科学調査を主目的としたもので、最新の科学技術調査や150年前のノヴァラ号の成果との比較が期待されている。Benedikter, Christoph/Rohrbacher, Peter, “Novara-Expedition 2007-2009,” in: Kraus, Carl (Red.), a.a.O.

³⁸ Scherzer, Karl von (Bearb.), *Reise der österreichischen Fregatte Novara um die Erde, in den Jahren 1857, 1858, 1859, unter den Befehlen des Commodore B. von Wüllerstorff-Urbair. Beschreibender Theil. 1-3* (Wien, 1861-62). 5千部発行されたこの旅行記は、販売一年で品切れとなり、後に2巻で構成される普及版や増訂版が出された。筆者の手元にあるのも、この1864年に出された普及版(Volksausgabe)であり、残念ながら初版には目を通すことができなかった。註52を参照。ただ、初版と同時に出された英訳版は、早稲田大学図書館に所蔵があるので参照することができた。註62を参照。なお、1876年の独語第5版は3万部を売り上げ、この時代のドイツにおける通俗科学書籍としては、A. フンボルト(Alexander von Humboldt)の『コスモス』に次ぐベストセラーであったという。Treffer, a.a.O., S.213-214.

³⁹ Hamann, a.a.O., S.67-68.

⁴⁰ Weber, a.a.O., S.40, 110.

⁴¹ Wachtel, a.a.O., S.7, 9. 十分な資金を用意しないまま創刊に踏み切ったヴェーバーには、長期信用貸し、な

らびに当時あまり例のなかった前金による定期予約購読制によって安定した資金を確保する目論見があった。1846年11月に陥った窮地では、実業界から支援を仰ぐことができず、救いの手を差し伸べたのは、彼の友人たちであった。Weber, a.a.O., S.40-44.

⁴² Ebenda, S. 77-82.

⁴³ Ebenda, S.44, 110.

⁴⁴ LIZ 6.Juni 1857 Nr.727 “Erdumseglung der Novara” (Bd.28, S.453-457).

⁴⁵ Ebenda, S.454.

⁴⁶ Ebenda, S.453.

⁴⁷ Ebenda, S.456

⁴⁸ Ebenda, S.457.

⁴⁹ LIZ 2.Januar 1858 Nr.757 “Die Erdumseglung der Novara II” (Bd.30, S.8).

⁵⁰ 『ウィーン新聞』(Wiener Zeitung)は、ノヴァラ号の移動記者としてホッホシュテッター (Ferdinand von Hochstetter) に現地報告を委託していたという。Organ, Michael, “‘Österreich in Australien’: Ferdinand von Hochstetter and the Austrian Novara Scientific Expedition 1858-9,” in: *Historical Records of Australian Science*, 12-1 (1998) p. 4.

⁵¹ ゼレニが遠征中に描いた千点近い作品のリストは、次の文献に掲載されている。Popelka, a.a.O., S.81-188.

⁵² Scherzer, Karl von, *Reise der Österreichischen Fregatte Novara um die Erde, in den Jahren 1857, 1858, 1859, unter den Befehlen des Commodore B. von Wüllerstorff-Urbair. Beschreibender Theil, Volksausgabe, Bd.1* (Wien, 1864) S.3-4.

⁵³ Dienstl, a.a.O., S.16-19.

⁵⁴ LIZ 2.Januar 1858 Nr.757 “Die Erdumseglung der Novara II” (Bd.30, S.7).

⁵⁵ LIZ 9.Januar 1858 Nr.758 “Die Erdumseglung der Novara III” (Bd.30, S.23-26).

⁵⁶ Ebenda, S.24.

⁵⁷ Ebenda, S.24-25.

⁵⁸ LIZ 16.Januar 1858 Nr.759 “Die Erdumseglung der Novara IV” (Bd.30, S.39-42).

⁵⁹ Ebenda, S.40.

⁶⁰ 当初「ノヴァラ号の地球一周」(Die Erdumseglung der Novara)であった連載タイトルも、4月10日付(Nr.771)から「ノヴァラ号の世界周航」(Die Weltfahrt der Novara)へと変更された。また、次にノヴァラ号自体のイラストが登場するのは、1859年9月17日付紙面におけるトリエステ帰港時のものである。LIZ 17.September 1859 Nr.846 “Ankunft der k.k. Fregatte Novara von ihrer Weltumseglung in Triest” (Bd.33, S.183-184).

⁶¹ ノヴァラ号への指令書に、科学調査、通商政策とならんで、海外での「ショー・ザ・フラッグ」が目的として掲げられていたことは、このことを物語っている。Treffer, a.a.O., S.13-14.

⁶² たとえばプロイセンのA. フンボルトは、ノヴァラ号の出航前に送った激励文のなかで、「この偉大で崇高な事業に全能の神のご加護が注がれることを祈っております。我が共通のドイツ祖国の榮譽のために！」と述べていた。Scherzer, Karl von, *Narrative of the Circumnavigation of the Globe by the Austrian Frigate Novara: undertaken by order of the Imperial Government, in the years 1857, 1858, and 1859 etc., Vol. 1* (London, 1861), xlix-1.

⁶³ LIZ 14.Januar 1860 Nr.863 “Die Expedition des preussischen Geschwäders nach den ostasiatischen Gewässern” (Bd.34, S.23-24). LIZ 21.Januar 1860 Nr.864 “Die Expedition des preussischen Geschwaders nach den ostasiatischen Gewässern II.” (Bd.34, S.48-50). LIZ 3.März 1860 Nr.870 “Die Expedition des preussischen Geschwaders nach den ostasiatischen Gewässern III. Denkschrift des Finanzministeriums über Zweck und Kosten der Expedition” (Bd.34, S.166). 1859年8月、プロイセン政府は東アジア三国(清国、日本、シャム)との間に通商条約を結ぶため、使節団の派遣を決定した。軍艦アルコナ号、テーティス号、輸送船フラウエンロープ号、エルベ号の計4隻からなるプロイセン東アジア遠征艦隊は、シンガポールで全権代表オイレンブルク (Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg) と合流した後、1860年9月に最初の目的地江戸湾に到着し

た。以後、日本（1861年1月）、清国（同9月）、シャム（1862年2月）との間に通商条約を締結し、ドイツ連邦構成国として初めて東アジアで外交関係を構築することに成功した。ノヴァラ号遠征とプロイセン東アジア遠征との因果関係については、以下の議論を参照。Petter, Wolfgang, *Die überseeische Stützpunktpolitik der Preußisch-deutschen Kriegsmarine 1859–1883* (Freiburg, 1975), S.56–57. Fenske, Hans, “Imperialistische Tendenzen in Deutschland vor 1866. Auswanderung, überseeische Bestrebungen, Weltmachtträume,” in: *Historisches Jahrbuch Görres Gesellschaft*, 97/98 (1978), S.376. Martin, Bernd, “Die Preußische Ostasienexpedition in China. Zur Vorgeschichte der Freundschafts-, Handels- und Schiffahrts-Vertrages vom 2. September 1861,” in: Kuo, Heng-yü/Leutner Mechthild (Hrsg.), *Dutsch-chinesische Beziehungen vom 19. Jahrhundert bis zur Gegenwart, Beiträge des Internationalen Symposiums in Berlin* (München, 1991), S.213–214. また、本稿とも関連があるメディアに取り上げられたプロイセン東アジア遠征の問題については、以下の論文を参照。鈴木楠緒子「オイレンブルク使節団とプロイセン自由主義者—小ドイツ主義的統一国家建設との関連で」『史学雑誌』112-1, 2003年。

⁶⁴ LIZ 9.Juni Nr.884 “Von Berlin nach Japan. Reiseskizzen von W. Heine I.” (Bd.34, S.411–413).

⁶⁵ Wachtel, a.a.O., S.9.

⁶⁶ 大川勝康「オイゲニー・マーリットと19世紀ドイツの市民文化」『政治学研究論集』（明治大学），20（2004年）。

⁶⁷ フランスで旅行誌の草分け的存在といわれる『世界一周』(Le Tour du Monde: nouveau journal des voyages)が創刊されたのは、1860年のことである。ちなみに、同誌の創刊者は、絵入り新聞『イリュストラシオン』の創刊メンバーの一人エドゥアール・シャルトン (Edouard Charton) であった。

⁶⁸ ただし、これらの世界の「情報」「知識」については、一つ重要な点を付け加えておきたい。つまり、これらの異世界の情報提供が、西欧市民の異国趣味、東方趣味に應えるものであったとしても、そこにはおのずと西洋の価値観が内包され、ステレオタイプ化されたイメージの形成へとつながっていた事実を見逃すことはできない。多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界 コロンブスからクックまで』岩波書店、1991年。

⁶⁹ ライプツィヒ商科大学教授でジャーナリズム研究の大家であったメンツは、LIZ 百周年を祝う寄稿のなかで、「この百年の歴史を書こうとするものは、史料としての絵入り新聞を見過ごすことはできない」と語り、編年史料、視覚史料としてのLIZの意義を指摘している。LIZ Juni 1943 Nr.5026 “100 Jahre Illustrierte Zeitung von Dr. Gerhard Menz” (Bd.200, S.236)。